

# 民衆宗教の世界観を歩く

いしはら やまと  
石原 和  
民博 プロジェクト研究員



宗教都市、名古屋を歴史散歩してみました  
如来教御本元・青大悲寺と筆者。  
如来教教祖喜之はこの地に生まれたという

寺社数が日本でもっとも多い都道府県はどこか——。じつは清水寺や伏見稲荷のある京都府でも東大寺のある奈良県でもない。意外なことに愛知県なのだ。けれども、名古屋で生まれ育った筆者にとって、この順位はあまりピンとこない。そこで、その“宗教都市”ぶりを、江戸時代後期の名古屋城下に住む人びとのなかから登場した如来教を手がかりに探ってみることとした。



東別院。1805年に始まる再建の際には、名古屋周辺の諸藩から人びとが奉仕のために集まり、非常に賑わった（写真はすべて2018年に撮影）



円通寺秋葉堂。如来教でも火まつり当日にこれに関する説教が開催された記録がある



熱田金刀比羅神社。青大悲寺から歩いて10分ほどの距離にある。この小社も往時は現在よりも広い社域を有していたという



への玄関口であったが、ここを実際に歩いてみるとこの地が宗教的な空気に包まれた場所であったことに改めて気づかされる。熱田神宮を東へ抜け、大津通を南に下ると右手に円通寺が見えてくる。この寺院は火防の利益をもつ秋葉大権現の信仰で知られており、現在も毎年二月一日に火まつりがおこなわれている。この秋葉信仰が名古屋で急速に広がっていったのも一八〇〇年前後のことであった。なかでも、名古屋での拠点であるこの円通寺は信者の急激な増加に伴い、拡大再建をおこなうほどであったという。わたしが立ち寄った日は、風が強く、ひどく乾燥した日であったから、当時であれば、多くの人が火事が起こらぬよう祈願していたことだろう。

円通寺を出て大津通をしばらく北上すると東別院（真宗大谷派名古屋別院）がある。如来教が開教したのはこの寺院の拡大再建の時期にあたり、多いとき



名古屋市熱田区西高蔵駅周辺

には日に約一万人もの名古屋城下および近郊の信者を動員して工事が進められていたという。その一方で、救済のあり方にかかわる論争が僧侶や信者のあいだで激烈に繰り広げられていた時期でもあった。

## 宗教都市、名古屋と如来教

こうした地域の神仏たちは如来教の世界のなかに登場する。喜之の在世期、如来教の信仰生活の中心にあったのは御日待とよばれる喜之の説教で、信者や喜之の自宅が開かれた。ここでは、信者の願いに対して、神がかりした喜之がそれに応答していくというスタイルがとられた。如来教の説教では、先に見た秋葉大権現や浄土真宗の宗祖親鸞などさまざまな神仏が喜之の体にくんだり、信者に語りかけている。

そのなかでも、ほとんどの説教で喜之にくだったのは金毘羅大権現であった。如来教においては、金毘羅大権現は現世を生きる人びとを救済するために如来から遣わされた神として位置づけられた。秋葉や親鸞など他の神仏はこの金毘羅大権現を中心とした秩序のなかに再編成された。この他に、喜之のもとに集う人びとにとって身近であった熱田神宮の神や、知多半島の緒川の入海神社の入海大明神も喜之の神がかりの正統性を示す重要な場面で登場している。

如来教には、名古屋・熱田を中心とした地域に根つき、一八〇〇年前後に盛り上がりを見せていた諸信仰の動向が強く反映されている。いいかえれば、僧侶や神職でない俗人であった喜之やその信者たちの、さまざまな神仏とかかわる信仰の感覚や生活のあり方が刻みこまれているのである。こうした意味で、如来教の世界観には“宗教都市”名古屋が凝縮されているといえよう。

名古屋市営地下鉄・名城線、西高蔵駅を出てすぐの築地堀に沿って歩くと、尾張六地藏のひとつに数えられる鉄地藏がある。この鉄地藏がある寺院こそ、如来教の御本元・青大悲寺である。鉄地藏をとり過ぎ、山門から境内に入ると、苔むした緑の庭園と茶色くこけた本堂・庫裡に囲まれて白く目立つ金毘羅堂を臨むことができる。一八〇二年八月一日、この場所で元武家奉公人の喜之が雪隠（トイレ）に籠っていたとき、靈感に襲われ、口から自然にことばがあふれた。これが如来教の始まりだとされる。当時四七歳の女性教祖、喜之が開いた善心の獲得による救済を説く信仰は、尾張藩士や名古屋城下の町人らに広まった。幕末には江戸城大奥へも広がったとも、戦前には信者二〇万人とも伝えられるが、現在は信者数を減らしている。

## 熱田の寺社を歴史散歩

如来教は周辺地域の寺社の神仏と深くかかわり合いながら自らの世界観を創り上げていった。このことを念頭におきながら熱田地域を歴史散歩してみよう。

青大悲寺から伏見通を南へ進んでいくと旗屋町の交差点に着く。この交差点からすぐのところは金刀比羅神社がある。金毘羅大権現がこの地にもたらされたのは一七七二年のことと伝えられている。この大通の脇に佇む小社は、一八〇〇年前後の全国的な金毘羅信仰ブームのなかで創建されたものと推測できる。この勧請年は、名古屋で金毘羅大権現三十三箇所という巡拝が整備されていく時期にあたり、宗教的高揚のなかで多くの人びとの信仰を集めていたと思われる。残念ながら、今やその名残を窺うことはできないが、喜之とその信者たちもそうした熱狂を肌を感じていたことだろう。

金刀比羅神社の道路を挟んで向かい側には熱田神宮がある。この神社を中心としてこの地域には寺社や古墳が集中しており、荘厳な雰囲気醸し出している。熱田は東海道を行き来する人びとにとって名古屋城下